

ルポルタージュ

小高の今とこれからを探る

早稲田大学政治経済学部政治学科
映像ジャーナリズム専攻
高橋恭子ゼミ

4年 池本菜南子

【概要】

「今、未来に向けて頑張っている人に光を」

東日本大震災から12年が経とうとしている今、福島県南相馬市小高区を取材する。

地震、津波、原発事故、多くの被害を受けた南相馬。住民全員が一度避難を余儀なくされた小高。それらの被害に懸命に立ち向かい、復興に取り組み続けてきた人が大勢いる。それでも復興はまだ終わらない。今でも、地元の未来に向けて頑張っている人たちがいる。そんな人たちに取材をし、今の福島を知る。そして、これからの自分自身の生き方を考え直すきっかけとなる、そんな取材記録である。

本稿は、「食材」「若者」「移住者」という3つのテーマに沿って、取材を行った8名の方の話をもとにまとめている。序章では、本稿執筆にあたっての背景や取材の概要、全体の構成をまとめる。第1章では、小高の被害の状況や、これまでの復興の取り組み、そして実際に私の目で見た今の小高を記している。第2章から3つのテーマに入る。第2章は、「食材」。原発事故の被害状況や、これまでの取り組みをまとめ、そしてこれからの小高の食材の未来を考えていく。第3章は、「若者」。一度全員が避難を余儀なくされた小高は、大幅に人口が減少した。そんな状況の中、復興に取り組む若者と、挑戦する若者を支援する人がいた。この町での支援という言葉の意味を考え、未来を創造していく。第4章は、「移住者」。小高には、多くの移住者が存在する。移住者から見た小高、これまでの復興から、これからの復興を考えていく。そして、これからの小高を想像する。第5章で、これからの私たちの生き方を見つめ直していく。最後に課題と限界について言及し、本稿は完結する。

今回、8名の方への取材から、福島県南相馬市小高区をはじめとする被災地への関わり方を考え直すことができた。純粋な気持ちで関わろうとすること。当たり前を疑ってみること。今そこにいる人たちとどう町を作り上げていくのか考えてみること。実際に足を運んで、話を聞いて、この目で見たからこそ得られたものがそこには確かにあった。

自分自身の価値観が大きく動く体験をできるかもしれない。見えなかった世界が見えるようになるかもしれない。そんな可能性を秘めた素敵な町小高にぜひ足を運んでみてほしいと思う。

目次

序章	3
1. 研究の目的・背景	3
2. 研究手法・取材対象	4
3. 全体の構成	4
第1章 小高のこれまでと今	5
東日本大震災による小高の被害	5
これまでの復興の取り組み	7
私が見た現在の小高	10
第2章 小高の食材	13
小高の原発事故被害・風評被害	13
被害を乗り越えた食材たち	14
東京から見た福島の食材とは	18
福島の食材の未来	21
第3章 小高と若者	23
戻ってこない若者と戻ってきた若者	23
若者への支援とは	25
“支援”とは	27
これからを見つめる	37
第4章 小高と移住者	29
よそ者から見た小高とは	29
これまでの復興とこれからの復興	32
小高の未来を想像（創造）する	34
第5章 まとめ	35
これからの私たちの生き方を考える	35
終わりに	36
課題と限界	36
参考文献	37

序章

1. 研究の目的・背景

本稿は、「今、未来に向けて頑張っている人に光を」という思いから始まった、今と未来にフォーカスした取材記録である。東日本大震災から12年が経とうとしている今、福島の人々はどのような生活をしているのか。復興はどこまで進み、今何に取り組んでいるのか。これからの福島はどうなるかとしているのか。風化が謳われている今だからこそ、私が現地で聞き取ったことをここにまとめたい。今の福島、これからの福島を覗き、これからの自分自身の生き方を考えるきっかけとなる、そんな記録にしたい。そう思って、書き始めている。

2011年3月11日。

この日付を見たら、多くの人が一つのことを想起するだろう。14時46分に起きた大きな揺れがたくさんの人の命とたくさんの大事なものを奪った。

あれから11年。小学生だった私は大学生になった。そして、この日付のことを知らない子供たちが多くなった。多くのことが変化したこの11年、東京にいる私たちはどう生きてきただろうか。これから生きていく中で、忘れ去られてしまうのだろうか。

今の福島を見て、生の声を聞いて、風を感じる。そして、文字に残す。行かないとわからないリアルな声をここに残したいと思う。

私と小高の出会いは偶然的なものであった。震災のこと、津波のこと、原発事故のこと。私はこの11年間ニュースで見聞きするだけの情報のみを入手してきた。自分からもっと福島のことをもっと知りたいたいと思い、環境省の環境再生・資源循環局が出している「福島 環境再生 100人の記憶¹」という本を手にとった。そこで出会ったのが後に登場する一般社団法人オムスビの代表理事を務められている森山貴士さんだった。大阪から福島県南相馬市小高区に移住し、“よそ者”だからこそできる支援というものを小高で続けられている記事を読み、私のようなよそ者にできることがあるのかもしれないと感じ、ぜひ会って話を聞きたいと思ったのがきっかけだった。

多くの技術が発達し、様々な産物が創出された今の世の中、必死に復興に向けて努力している人がいる。そんな人たちに光を灯したい。そんな人たちの取り組みを多くの人に知ってほしい。そして、それは誰かの希望になる。そう信じて。

¹ 環境省 環境再生・資源循環局(2021)「福島 環境再生 100人の記憶」株式会社マスターリンク

2. 取材手法・取材対象

本研究を作成するにあたり、8名の方に取材を行った。飲食店の店主の方への取材は、実際に飲食店の店舗に足を運び、話を聞いた。そして取材にあたり、福島県南相馬市小高区に1度訪問した。訪問期間は2022年11月26日から27日の1泊2日で、小高のみならず、隣の浪江町にある請度小学校や、その隣の双葉町にある伝承館など実際に被害を受けた場所を訪問した。そして、小高で4名の方へ取材活動を行った。公益社団法人福島相双復興推進機構の方への取材はリモートで行った。

以下は取材を行った人物をまとめた表である。

表1：取材先まとめ

名前（敬称略）	職業	取材日
渡部雄一	飲食店「かわうち」店主	2022年11月22日
安部あきこ	農業者、語り部	2022年11月26日
小林友子	双葉屋旅館4代目女将	2022年11月26日
森山貴士	一般社団法人オムスビ代表理事	2022年11月27日
和田智行	小高ワーカーズベース代表取締役	2022年11月27日
緒方弘志	公益社団法人福島相双復興推進機構 営農再開グループ グループ長	2022年12月1日
國分康史	公益社団法人福島相双復興推進機構 営農再開グループ	2022年12月1日
福本裕司	飲食店「だし和食福もと」店主	2022年12月19日

3. 全体の構成

取材した方の生の声をもとに、今の小高の状況と、これからの取り組みについてまとめていく。テーマは大きく3つ。「食材」「若者」「移住者」である。これらのテーマについて、今を見つめ、これからの考え、私たち自身の生き方を見つめ直していく。

まずは「食材」。原子力発電所の事故により、大きく被害を受けた福島の食材たち。その被害は12年が経とうとしている今でもさまざまな形で残っている。そんな被害を乗り越えようとしてきた方々に話を聞いた。そして、これからの福島の食材の行方を見ていく。

次に「若者」。原子力発電所の被害によって一時避難を余儀なくされた小高の住民は、一度バラバラになってしまった。そこから戻ってくる人、戻ってこない人がいる中で、今の小高の若者に関する問題、取り組み、未来の展望をまとめていく。

最後は「移住者」。震災後小高に移住した人から見る小高とは、移住者と共に進めていく復興とはどのようなものなのか。新たな切り口から小高のこれからを考えていく。

そして、「未来」。これは、全てのテーマに共通する部分である。新たな復興フェーズに入った小高。これからの未来をどう創造していくのか。小高のこれからを一緒に考え、自分の生き方も見直していきたいと思う。

第1章 小高のこれまでと今

東日本大震災による小高の被害



写真1：安部あきこさん

――ここまで来たのよ、津波。

そう語るのは福島県南相馬市小高区で農業を営む安部あきこ（76）さんだ（以下安部さん）。安部さんは、小高マルシェ²という南相馬の美味しいを発信する農産物等直売所の代表を務められている元気な76歳。小高マルシェの店番をしたり、東日本大震災・原子力災害伝承館で語り部として活動したり、他の地域に自分で作った野菜を届けに行ったりと、とても活動的な日々を送っている。そんな安部さんも、実際に福島で東日本大震災を経験し、その目であの大きな津波を見た一人である。

“震度6強”。

2011年3月11日14時46分、福島県南相馬市をとてつもなく大きな揺れが襲った。南相馬市は、東日本大震災による直接死が636人、震災関連死が520人と大きな被害を受けた。そして、住家被害も南相馬市全体で5312世帯、小高区のみで2234世帯が全壊・大規模半壊・半壊・一部損壊いずれかの被害を受けた。その被害は地震によるものと津波によるものに分けられる。安部さんが語った津波の到達点は、図1の黒丸の部分に当たる塚原～角部内の地域である。³

² 小高マルシェホームページ<https://odaka-marche.com>（2022、12月30日閲覧）

³ 南相馬市（2022）「東日本大震災とその後 南相馬市の現況と発展に向けた取組」<https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/57/torikumiR409.pdf>（2022、12月30日閲覧）

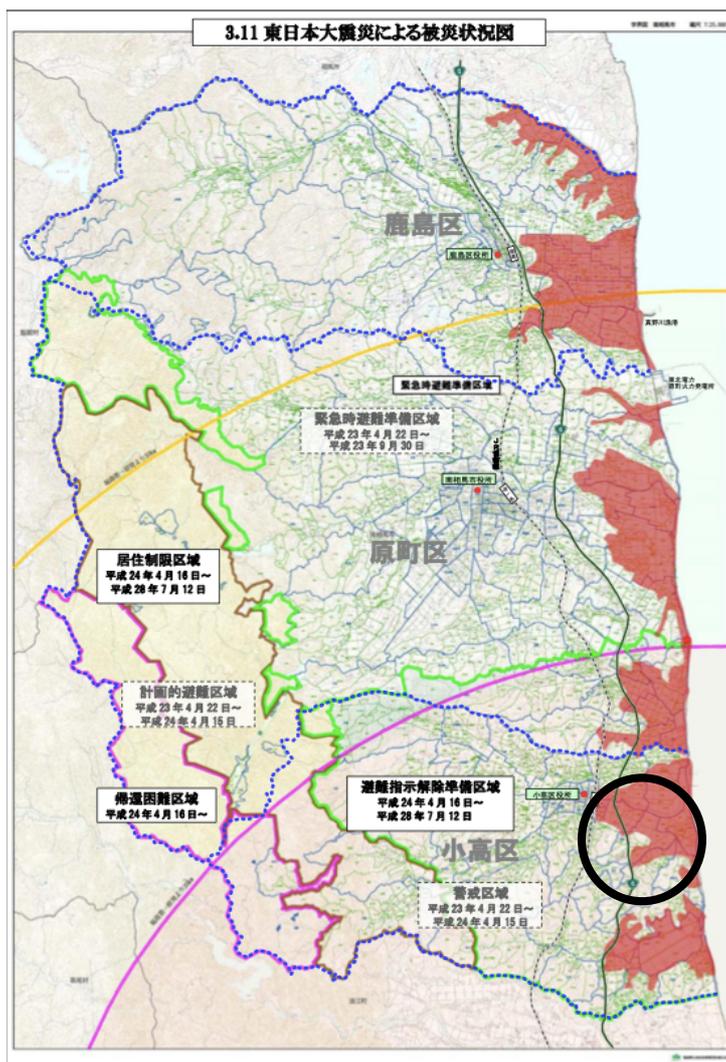


図1：東日本大震災による被害状況図

——みんなバラバラ。ほとんど空き地状態でしょ。

安部さんは町の様子を見て寂しそうに語った。小高を襲ったのは、地震だけでも津波だけでもなかった。それは、福島第一原子力発電所の事故である。津波により冷やす機能を失った結果、水素爆発を起こした福島第一原発。⁴その爆発によって、小高に住む人たちはバラバラになってしまった。図1の通り、小高区全域が警戒区域（福島第一原子力発電所から半径20km圏内の区域）とされ、区域内の住民は避難を余儀なくされた。後に、「警戒区域」と「計画的避難区域」は、年間積算線量の状況に応じて、「避難指示準備解除区域」、「居住制限区域」、「帰還困難区域」に見直しされ、小高区のほとんどが避難指示解除準備区域となった⁵が、戻ってくる住民は少なかったそう。

⁴ 中部電力ホームページ「福島第一の事故原因は、もうはっきりしたの？」 https://www.env.go.jp/chemi/rhm/portal/qa/a_45.html（2022、12月30日閲覧）

⁵ 福島県庁ホームページ「避難区域の変遷について—解説—」 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/cat01-more.html>（2022、12月30日閲覧）

――新築したのは3分の1くらいだよ。あとはもうここから出てそれっきり。

安部さんはそう教えてくれた。小高には確かに家は見えるが、その全ての家に人が住んでいるとは限らない。新しく建てた家に住む人もいれば、あの時から時間が止まってしまったような家も多い。実際に、小高区の人口はかなり減少している。図2の通り、2011年3月11日時点での小高区の人口は12842人なのに対し、2022年9月30日時点では、3837人と1/3程度に減少している。特に、生産年齢人口は7579人から1759人へと大幅に減少している。福島第一原子力発電所の事故は、小高の人々をバラバラにしてしまった。⁶



図2：市内居住人口の震災時と現在の比較

これまでの復興の取り組み



写真2：小林友子さん

――ねずみぺったん。

JR小高駅前すぐのところにある、双葉屋旅館の4代目女将小林友子さん（以下小林さん）は、震災後の苦勞を語ってくれた。1年間帰れなかった双葉屋旅館は、相当ひどい状態だったという。損壊した家

⁶ 南相馬市（2022）「東日本大震災とその後 南相馬市の現況と発展に向けた取組」 <https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/57/torikumiR409.pdf>（2022、12月30日閲覧）

屋、雨漏り、放置された食料品、ねずみ、それら全てを立て直さないといけない。小林さんは、2011年内に3回あった一時帰宅で、ある程度旅館内の食料品は外に出しておいたため、そこまで旅館内の被害はひどくはなかったものの、ネズミの発生にはとても苦労したという。2011年5月10日の朝日新聞の記事内でも、一時帰宅について「冷蔵庫の中のを捨てるので精いっぱい。2時間はあっという間でした。」と話す吉岡ヒデ子さん（63）が取り上げられていた。⁷

小林さんたち小高の住民が帰宅を許されたのは、2012年4月16日。「年間積算線量が20ミリシーベルト以下になることが確実に確認された区域は、住民の方が帰れる準備をするため“避難指示解除準備区域”になった。」⁸

――準備区域ならここに助成金出してくださいって言いに行きました。

小林さんは、小高という町で、双葉屋旅館を続けた理由を語ってくれた。

――誰もいなくなったけれど、一軒ぐらい泊まる場所がないと。帰ってきた人やここに来た人がふらっと泊まれるような宿でありたいなと。このままでは終われない、そう主人もそう思っていて。自分たちが途中で、両親のあとに引き継いで、やっと自分たちここでちゃんと旅館やろうとして成り立っていたものをやすやすと捨てられるかなと思った時に、それはないかなと。もう一回頑張ってみるのもいいのかなと。誰もいなくなったとしても誰かは来る。旅館ってそうじゃない。だからありかなと思って。

続けると言っても簡単なことではない。避難指示解除準備区域とはいえ、助成金がすぐには出なかったという。いつか戻ってくるための準備をするために助成金が必要だと小林さんは強く主張し、力強く営業再開に向けて一歩を踏み出したのだ。

⁷ 「『2時間はあっという間』 住民ら初の一時帰宅」（2011、5月10日）『朝日新聞DIGITAL』<https://www.asahi.com/special/10005/TKY201105100549.html>（2023、1月2日閲覧）

⁸ 福島県庁ホームページ「避難区域の変遷について―解説―」<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/cat01-more.html>（2022、12月30日閲覧）

小高では、震災以降、「JR小高駅から西へ真っすぐ伸びる小高駅前通り沿いを中心に、新しい施設や店が誕生している」⁹という。そのいくつかを紹介している記事を引用する。

JR小高駅から歩いて約3分のところにある、芥川賞作家・劇作家の柳美里さんが2018年にオープンした本屋「フルハウス」。(スーモジャーナルの記事より引用)

南相馬市が復興拠点として整備し、2019年1月に誕生した「小高交流センター」には、多世代が健康づくり(が)できる施設や、フリーWi-fiに対応する交流スペース、起業家向けのコワーキングスペース、飲食店などがそろう。(スーモジャーナルの記事より引用)

「小高工房」は、2017年3月オープン。畑でイノシシの被害がないトウガラシに着目、3人で栽培を始め、現在は80人以上の住民を巻き込んだプロジェクトに成長、新たな特産品に。(スーモジャーナルの記事より引用)

2021年に本格的に始まる新たなプロジェクトでは、民家を改装した酒蔵で、日本酒にホップを用いた伝統製法や、ハーブや地元の果物などを使ってCraft Sakeをつくる「haccoba (ハッコウバ)」がある。(スーモジャーナルの記事より引用)

このように、小高では震災以降、住人自らの力で多くの新しい活動を始めてきた。そして今もその取り組みは続けられている。一度、全員が避難を余儀なくされた町、小高。多くのものを失った小高。そこからの町おこしは、今、様々な形で実を結び始めている。それは紛れもなく、避難解除されたあの日からずっと続けてきた住民の努力の賜物だろう。新たな取り組みも怯まず挑戦し続けてきた人々が、小高にはいた。

⁹ スーモジャーナル (2021、1月25日) 「震災で無人になった南相馬市小高地区。ゼロからのまちおこしが実を結ぶ」 <https://suumo.jp/journal/2021/01/25/177724/> (2023年1月17日閲覧)

私が見た現在の小高



写真3：浦尻貝塚から見た日本海

小高区にある浦尻貝塚から見た海。目の前に広がる畑は、震災以降にできたものである。震災以前は、そこにも家があった、住む人がいた、町があった。

小高に初めて訪れた私を案内してくれたのは安部さんだった。震災当時、ここから押し寄せる津波を見ていたという。今でもたまに訪れるそうだ。

――やっぱり海が好きだから。たまに遠回りしてここに来る。

小高を襲った津波はここから見えていた多くの家を、人を、暮らしを奪った。それでも、ここから見える海は、誰かにとっては特別な海で、大好きな場所であることは変わらないのだ。そんな大切な故郷は、形を変えたとしても、こうして残り続けている。私たちにとっては何気ない景色かもしれないが、誰かにとっては大切に特別な景色かもしれない。



写真4：小高マルシェの様子

そんな安部さんが代表を務める小高マルシェ。毎週木・金・土・日の10時から14時に地元の農家さんが作った野菜や、手作りの工芸品、アクセサリなどを販売している。私は、2022年11月26日（日）の

13時半頃、小高マルシェに行った。終了間際だったにも関わらず、そこには多くのお客さんの姿があった。そこには多くの笑顔と多くの会話があった。

—こんにちは。
—今日はお休み？
——大きくなったね。

何げない会話を聞いて私は少しほっこりした。この人は明るくて、仲が良くて、お互いに支え合っ
て生きている。

——東京の学生さん？

私のようなよそ者にも優しく声をかけてくれた。それは、一度全員が“よそ者”を経験しているからだ
と、小高で若者の起業支援を行う小高ワーカーズベースの代表取締役、和田智行（45）さんは言う。

——ここに住んでいる人は、全員小高から一回出た人たちなので、知らない土地で生活する不安と
か、その時の寂しさとかを知っている。知らない地域のコミュニティに入っていく不安も、自分自身で
痛感していると思う。だからこっち戻ってきた時は、そういう初めて来たような人たちにも、不安な気
持ちとかを理解しているから、ちょっとでも和らげてあげようとか協力してあげようみたいに思ってい
る人が多いのではないかなと思う。



写真5：JR小高駅



写真6：JR小高駅から見た町の様子

小高駅に降りた時は、とても人が少なく、寂しい印象を受けた。しかし、小高駅からまっすぐ伸びる道を進んでいくと、たくさんのお店や交流する場所があり、多くの人が集まっていた。小高交流センター、多くの飲食店、小高ワーカーズベースや小高工房といったさまざまなプロジェクトを行なっている場所。小高に住む人は、自然と集まり、言葉を交わし、生活を共にしていた。



写真7：小高交流センターのイルミネーション

初めて来た福島は、小高はとてもおっとりとしていた。決して活気に溢れかえっている様子でも、人が少なく寂しい様子でもない、それぞれがそれぞれの人生を一生懸命生きているようだった。震災以降、多くのプロジェクトが立ち上がり、新たな事業が生まれ、新たな交流が生まれた。それによって、多くの人の笑顔をお互いに見ることができるようになった。小高の人は、互いの笑顔を見て、互いに支え合いながら生きている。そんな支え合いを垣間見ることができたような気がする。

第2章 小高の食材

小高の原発事故被害・風評被害

——風評じゃないよ、実害だよ。だって放射能に汚染されたもの誰が食べるの。みんな嫌でしょ。自分たちだって食べないのだから。風評じゃないの。実害なの。

双葉屋旅館の女将、小林友子（69）さん（以下小林さん）は、はっきりと宣言した。東日本大震災は小高の食材にも大きな被害を与えた。図3は、復興庁が発表している東京電力福島第一原子力発電所から半径80km圏内の事故から1ヶ月後の2011年4月29日の空間線量率である。¹⁰環境省は、「空間線量率・毎時0.23マイクロシーベルト（ $\mu\text{Sv/h}$ ）という値を安全側に立った仮定の下で定めている。」¹¹その値の何倍もの数値が計測されている地域が、広い範囲に広がっていることがわかる。

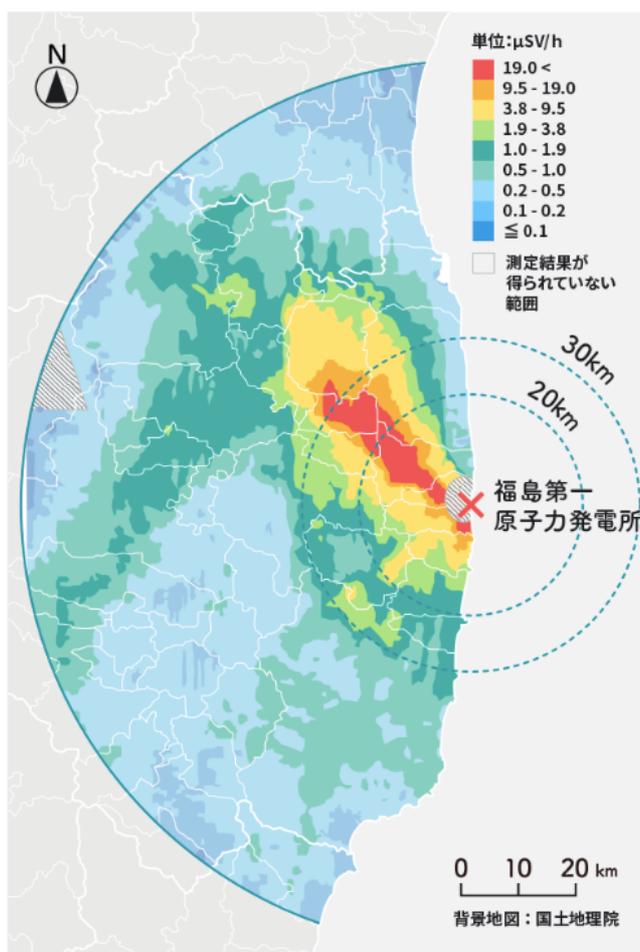


図3：東京電力福島第一原子力発電所から半径80km圏内の空間線量率

¹⁰ 復興庁 福島は今 「震災復興の取り組み10年の軌跡 『福島県の放射線量』」 https://www.fukko-pr.reconstruction.go.jp/2018/fukushimanoima/10th_trajectory/radiationdose/ (2023、1月4日閲覧)

¹¹ 環境省 放射線による健康影響等に関するポータルサイト 「Q&A」 https://www.env.go.jp/chemi/rhm/portal/qa/a_45.html (2023、1月4日閲覧)

風評被害も確かにあったという。

——放射能がどうのこうのって、原発の近くだからそれはあったよね。全部検査して、測って、OKって言われて、売る。検査済みの証明書もらって、それを貼って、そういうような感じだった。

農業者の安部さんは当時のことを思い出しながら話してくれた。実際に放射能の被害を受けた福島の食材たちは、安全であるかどうかをしっかりとチェックすることが必要不可欠になっていた。それでも、どんなに大変でも、何を言われようと、安部さんたちは作り続けた。本当に安全で美味しい食材であることを知ってもらうために。

被害を乗り越えた食材たち

放射能の被害に立ち向かうために始まった活動が“菜の花プロジェクト”だ。小林さんは、当時の様子を詳しく教えてくれた。

——放射能に汚染された土地に最初はひまわりを植えた。ひまわりで農地は除染されるっていうから。最初はひまわりだったけれど、ひまわりは咲いた後の始末が大変。菜種の方がセシウムを吸いやすいということもあって、菜種の方にシフトしてきた。

その菜種も、自分達の手で放射能を測ることから始まったという。

——東北大の方から支援されて搾油機を貸してもらったって言うから、その搾油機を貸してもらって測定センターで絞った油を測ったの。限りなくほとんど出ないってちゃんとわかった。

こうして生まれたのが“油菜（ゆな）ちゃん”である。地元・福島県南相馬市にある相馬農業高校に通う生徒さんと共に、商品開発を行い、菜種油以外にも、“油菜ちゃんマヨネーズ”や“油菜ちゃんドレッシング”といった商品も生み出されたようだ。

こうした活動のヒントになったのは、“ナロジチ再生・菜の花プロジェクト”であったという。これは、NPO法人チェルノブイリ救援・中部がウクライナで2007年から始めたプロジェクトで「菜の花を栽培して放射能を土壌から吸出し、収穫したナタネから油を搾り、その油を燃料などに利用する」¹²といったもの。これらを参考にし、小林さんを含めた農業者の方々は、菜種を生産し、その油を搾り、実際に測り、安全であるということを確認した。「菜種に吸収される放射能は水溶性のもので、油の中には溶け込まないため」¹³、このようなことが達成できたのである。

このようにして、小林さんたちは希望を見つけ、前に進み始めた。放射能に汚染されても、“自分たちで作ったものを食べたい”という強い心がなかったら、放射能の実害に負けてしまっていたかもしれない。今の状況を乗り越えるための知恵と、多くの努力があったからこそ、今の小高があるのだと思う。

¹² NPO法人 チェルノブイリ救援・中部ホームページ 「放射能に負けない！なたね油で福島の農業復興を～南相馬市・菜の花プロジェクト～『油菜(ゆな)ちゃん 誕生物語』」 https://peraichi.com/landing_pages/view/yunachan-story/ (2023、1月5日閲覧)

¹³ NPO法人 チェルノブイリ救援・中部ホームページ 「放射能に負けない！なたね油で福島の農業復興を～南相馬市・菜の花プロジェクト～『油菜(ゆな)ちゃん 誕生物語』」 https://peraichi.com/landing_pages/view/yunachan-story/ (2023、1月5日閲覧)



写真8：油菜ちゃん（双葉屋旅館HPより）

——結構東京でも？——売っていたよ。

安部さんは当時、月に一度、東京の道路のスペースで野菜や、手作りの梅干しや味噌などを売っていたという。

——マルシェやる前は私杉並行って、月一野菜を持って行って売りに行っていたの。そこで売り語りするの。向こうの人は待っている、月一この日は来るってわかっているから。今度なになに持ってきてって言われて。

そう嬉しそうに話してくれた。

本当に美味しいものは買ってくれる。原発事故による放射能の実害と、それに伴う風評被害にも安部さんは前向きに立ち向かっていた。

放射能による実害とそれに伴う風評被害、それらは小高の農業者の方々の心と身体を深く傷つけただろう。しかし、農作物を買ってくれるお客さんの存在が、楽しみに待ってくれるお客さんの存在が確かにあって、その存在こそが小高の農業者の方々を支えていたのだと私は思う。心無い言葉ばかりが取り上げられる一方で、心から手を差し伸べてくれる人は間違いなくいた。そしてその手をしっかりと握ろうとして、もがき続けた小高の人たちがいたことを忘れてはならない。

「福島野菜、東京で売らないで」。

私は衝撃的な記事を見つけた。それは、JR目黒駅、高円寺駅、川口駅や大宮駅など、首都圏のJR駅構内約10カ所で、福島県産野菜を日替わりで巡回販売する「福島マルシェ」での出来事を取り上げた記事だった。

「あんたたち福島から来たの？来ないでよ。他のところ売ってちょうだい」と60代くらいの女性に言われたのは忘れられないです。今でもたまに思い出しますね。でも福島で野菜を作り続けている農家を考えると、辞めるわけにはいかない。むしろ風評被害をなくすためには、東京で売り

続けることが大事だと思いました。¹⁴ (BUSINESS INSIDERの記事より引用)

私が取材した、安部さんと小林さんから聞いた前向きな取り組みの背景には、このような心無い言葉を放つお客さんもいた。どんなに検査をして、安全だと言っている、どんなに時間が経ったとしても、確かに風評被害はあった。

ここで、被災県の食品について調査をした、NHK放送文化研究所(2021)「世論調査にみる震災10年の人々の意識 ～「東日本大震災から10年復興に関する意識調査」の結果から～」を以下に引用する。

現在流通している被災県の食品については、人々はどう思っているのだろうか。『安心だ(「どちらかといえば」を含む)』と答えた人は、全国が49%、被災3県が52%で、全国、被災3県ともに『不安だ(「どちらかといえば」を含む)』(全国18%、被災3県17%)を大きく上回る。過去の調査とは調査方法が異なるため単純な比較はできないが、現在流通している被災県の食品が『安心だ』と答えた人は、5年前の2015年の調査では、全国が34%、被災3県が39%だったが、今回(2020年)は、全国が49%、被災3県が52%と大幅に増加し、被災県の食品に対する安心感が増している。¹⁵ (NHK放送文化研究所(2021)より引用)

¹⁴ 丹治倫太郎(2021、3月10日)「『福島の野菜、東京で売らないで』。震災後、駅でマルシェを続けてきた変化【3.11 #あれから私は】」 『BUSINESS INSIDER』 <https://www.businessinsider.jp/post-230977> (2023、1月11日閲覧)

¹⁵ NHK放送文化研究所(2021)「世論調査にみる震災10年の人々の意識 ～「東日本大震災から10年復興に関する意識調査」の結果から～」 https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20210701_8.pdf (2022、10月4日閲覧)

【質問】 東京電力福島第一原子力発電所の事故のあと、被災県などでは食品の出荷や流通において、放射性物質濃度の検査を実施していますが、あなたは現在流通している被災県の食品についてどのように考えますか。

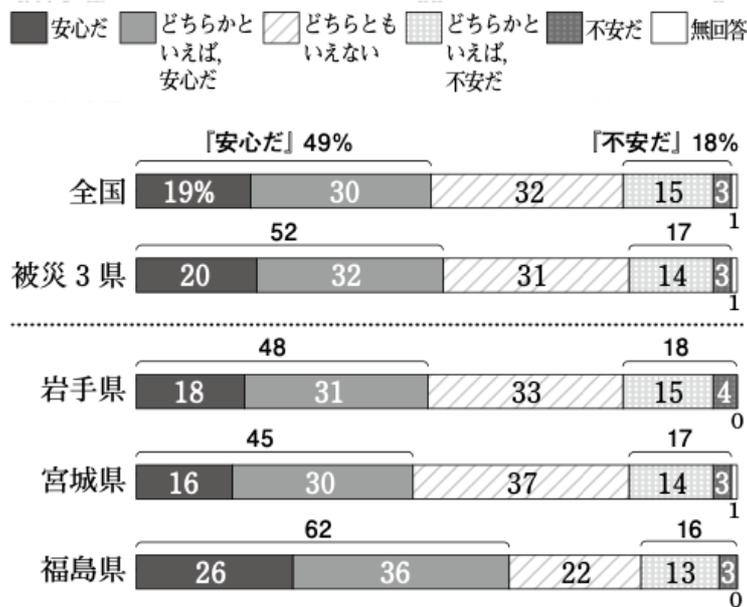


図4：被災県の食材に対する意識

2015年（配付回収法）と2020年（郵送法）の比較

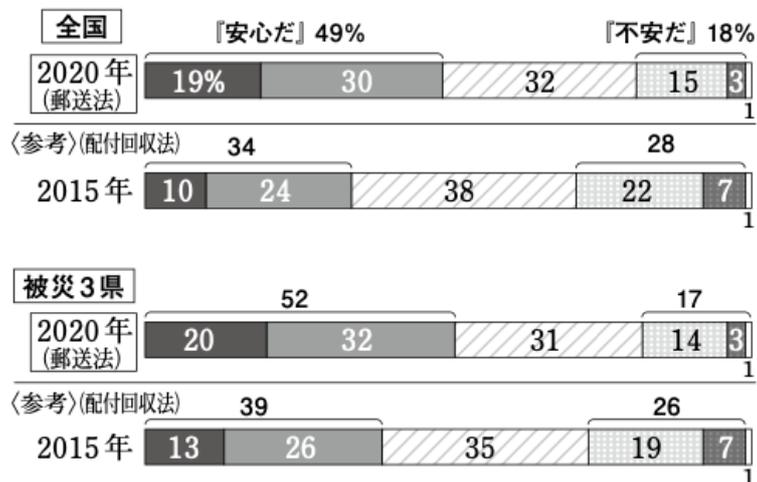


図5：2015年と2020年の比較

調査は、2020年11月11日から12月18日の期間で実施された。対象者は、全国の16歳以上3600人と、被災県は岩手県・宮城県・福島県の16歳以上1368人。郵送法で調査を行ったものだ。

被災県の食材に対する安心感が増しているのは事実のようだ。しかし、その割合が増えている一方で、変わらず不安だと回答する人が一定数存在しているのも確かである。震災から10年が経った今でも変わらず、そういった風評被害があることがわかる。

しかしこの事態に対して、小高ワーカーズベース代表取締役の和田智行さんはこう語る。

——福島の絶対食べませんって人って今ではもう、1割から2割くらいしかなくて。その1割から2割くらいの人のために風評被害って騒ぐのもどうなのかなって思っていて。例えば、ベジタリアンの人にどんなにこの肉美味しいから食べなよって言ったって、食べたくないものは食べたくないと思う。無駄って言うとあれだけど、あまり意味のないことを一生懸命やっているなと思っていて。風評被害って最初に実際にあったからこそ、色々な生産者さんがたくさん努力をして、それによって、絶対食べない人が1割から2割まで減ったっていうことだから、そこの努力は本当すごいなと思うし、今福島の食材が世界一安全な食材なんじゃないかと思う。

今でも風評被害は無くならない。山菜やキノコ類に関しては実害もまだ残っているという。しかし、重要なのは、実際に多くの被害を受けたのにも関わらず、今では安全でおいしい食材だと多くの人に認識を得ているという事実である。この変化が起きたのは、多くの農業者さんの努力、その他関係者の方の努力が間違いなくあったからであって、その多大なる努力を見逃してはならない。

東京から見た福島の食材とは

——本当にいいものだった。

小高マルシェの野菜を使って東京の京急蒲田駅のすぐ近くでお店を営む福本裕司（45）さん（以下福本さん）は、小高の食材について話してくれた。福本さんが営むお店は“だし 和食 福もと”。京急蒲田駅から徒歩3分のところに構える、和食屋さんだ。福本さんがお店を始めたのは、2019年3月。外国の方にお寿司や高級な料亭のような日本料理よりも、いわゆる家庭で食べる料理、和食を食べてほしいという思いから始めたという。福本さんは、出身が徳島で、徳島の食材や新潟のお米など、地域の丁寧に作られた美味しい食材を使いたいと考えていた。

そんな時に、

——いいものいっぱいあるので野菜とか見てください。

そう言われ、出会ったのが小高の野菜たちだった。

——是非是非いいものであれば。美味しいものであれば。

福本さんは、快く受け入れ、実際に小高の食材を見て、小高マルシェとの関わりが始まった。



写真9：福本裕司さん

――鮮度や旨味が全然違う。

私は、福本さんに福島の食材を使っていることの影響やお客さんの反応を尋ねた。福島の食材に対する風評被害に関することが返ってくると予想していたため、少し驚いたが、これこそが真実なのだと思う。福本さんは続ける。

――食べるとお客さんはわかる、味が濃いねとか。スーパーで買うものよりも味がしっかりしている。

出荷ギリギリまで、生育に使える地域の食材は、市場で売られているものよりも素材の味がしっかりしているという。福本さんが小高の食材を使う理由はここにあった。

――うちの店ではなかった。

福島の食材に対する風評被害については、お店に来るお客さんの反応はなかったという。理解のあるお客さんが多かったと話してくれた。また、福本さんは、普段のお客さんとのコミュニケーションの中で、食材の安全性について伝えるようにしているという。

――私もいうようにしています。こういう状態だから逆に安全ですよねって。伝えられたりするとやっぱり変わるのかなと思う。

風評被害がなくならないのは、福島の今を知らない人、知ろうとしない人が多いからなのではないかと改めて感じた。福本さんが言うように、安全であるということをきちんと伝えていくこと、そして何より、本当に新鮮で美味しい食材であることを伝えていくことが大事なのではないかと思う。そして、その伝えようとしている人の言葉をきちんと受け取ろうとすること、知ろうとすること、この歩み寄りが増えていけば、偏見も風評被害も少しずつ減っていく。本当に美味しい福島の食材が多くの人に食べてもらえるようになるのかもしれない。

同じように、福島の食材を東京で使っている飲食店がある。早稲田大学の近くにお店を構える“かわうち”さんだ。“かわうち”を営む渡部雄一（61）さん（以下渡部さん）は福島県川内村出身。1996年に開店し、26年お店を続けられている。白川の米、川内の米・野菜、その季節で採れるものを中心に地元福島

の食材を仕入れているという。



写真10：渡部雄一さん

――支援しているというかこっちが助けてもらっている。

お店を始めた時からずっと福島の食材を使い続けている渡部さんはそう話す。季節によって福島から仕入れることのできる野菜が限られているため、仕入れることのできないものは東京の八百屋で調達しているという。野菜は東京で買うよりも福島で仕入れた方が安い。だから、むしろ助けてもらっている。そう話してくれた。

――これからは魚。

渡部さんは、これからの支援について、福島の魚を仕入れたいと語った。これも、直接福島から仕入れた方が安いからという理由があるのは確かだ。今、福島第一原子力発電所での処理水を海に放出する計画が立てられている中では、福島の魚の値段は下がることが予想されるという。NHKの記事によると、これまでの風評被害を受けて処理水を海に放出することに反対する人もいる中で、今後どうなるかはわからない。しかし、安全面を考慮し、しっかり理解を得つつ、春ごろを目処に進めていく方針だそう。¹⁶

¹⁶ NHK WEB 「福島第一原発 処理水放出の開始時期 春から夏ごろ見込む 政府」（2023、1月13日）<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230113/k10013948421000.html>（2023、1月17日閲覧）

――それを目当てにしているわけではないが、大丈夫だから、福島で取れる魚を使いたい、これは決めている。

渡部さんは、福島の食材への信頼と地元への愛情を胸に、そう強く決意を話してくれた。

このように東京など福島外の飲食店からの支援はどう届いているのだろうか。私たちのようなよそ者はどう福島を支援していけばいいのだろうか。小高ワーカーズベース代表取締役の和田さんはこう話してくれた。

――生産者も応援してもらいたいってあんまり思っていないと聞いて。単純にどこの野菜よりうちの野菜が美味しいから食べてほしいって、それだと思っている。逆に復興支援とかそういう文脈だけで使ってもらっても続かないというのはみんなわかっているの、あくまでも美味しいと感動してくれた人に使ってもらいたいってそういう気持ちが強いのではないかなと思いますね。

――うちもガラスアクセサリは、支援で買ってもらうものじゃなくて、ちゃんものとして、可愛いなとかつきたいなって思うものを作るという風にやっているの。これ可愛いってなって、どこで作っているのだろう、と見た時にたまたま福島だった。じゃあ何か買ってみよう、そういう順番だったらいい。福島のものから入って、色々あるけどこれを買ったら福島のためになるから買ってあげようみたいな。そういうのはあんまり望ましくないと思います。

“支援”をしよう、何か手伝ってあげようという形で福島と関わるのではなく、単純に福島で作られているものの良さを見つけてほしい。そんな想いが伝わってきた。

“支援”というものは、“支援”する側とされる側の立場の差があるようなものではなく、純粋な気持ちで向き合うことなのかもしれない。純粋に、福島に興味を持って、知ろうと思うこと、向き合おうとすること、それこそが“支援”につながるのだろう。

福島の食材の未来

――漠然とした不安をなくしていければいいな。

福島の食材の安全性を広め、明るい未来を作ろうと活動をしている人がいる。公益社団法人福島相双復興推進機構の営農再開グループの緒方弘志（56）さん（以下緒方さん）と國分康史（46）さん（以下國分さん）だ。

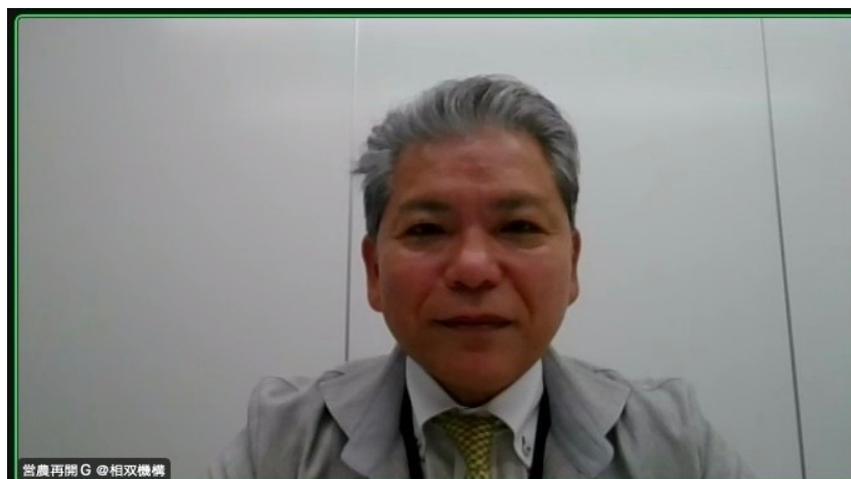


写真11：緒方弘志さん



写真12：國分康史さん

福島相双復興推進機構の活動は2015年から。そして、2017年から営農再開として、農業者さんへの訪問が始まったという。まずは、営農再開にあたっての要望や困りごとを伺うことから始め、それらを解決していき、環境を整えていくこと。それが福島相双復興推進機構営農再開グループの主な活動内容である。機構自体が、実際に制度や予算を管理しているわけではないため、市町村や県に農業者さんの要望や困りごとを伝え、解決に向けて動き出すという立ち位置は今現在も変わらず活動を続けている。

活動内容を教えてくれた緒方さんはそれ以外の活動についても話してくれた。他にも、風評被害を乗り越えるための活動を行なっているという。それは、価格帯を上げるためのデザインや加工・売り方などの工夫を、農業者さんの要望に沿って提案し、一緒に取り組んでいくというものだ。そして、福島の食材と東京の飲食店をつなげる業務として、外部のコンサルタント等に委託し、直接繋ぐ活動もしている。

さらには、食のプロジェクトという新たな活動を進めていると國分さんは言う。それは、相双地域の食材を“高付加価値化”し、首都圏に情報発信をしようという取り組みである。概要としては、食のイベントを相双地域の地元で行い、そこで専門家の方にメニューを開発していただき、それらを首都圏のホテルのビュッフェなどで使用できるように業務用加工し、販路を開拓することで、地元裨益するような活動だという。実際に開催したイベントをいくつか紹介してくれた。

一つ目は、孫の手トラベルというフードキャンプ事業をやっている会社と連携をして、福島の食材を使ったアウトドアレストランのイベント。内容としては、食事の前に収穫体験をしてもらったり、生産者やシェフの思いを語ってもらったりし、交流を深めながら、地域の良さを知ってもらいつつ、食材の良さを知ってもらうというもの。

二つ目は、中高生夏の映画作り体験。その行事の中で、最終日前日の夕食と最終日の昼食を相双地域の食材を使って提供したというもの。その時は、中高生のみならず、知事や町長など来賓の方々にも提供したという。

――知らないから発生する風評を発生させない。安心を伝えていきたい。

そう強く緒方さんは語ってくれた。

このように福島の食材を使った多くのイベントを開催しているのには、風評を払拭するには知ってもらうのが大事という強い思いがあるからである。

――単独では何もできない団体ではある。

そう言う緒方さんと國分さんは、それでも色々なことにチャレンジして、どうしたら福島の食材につ

いて多くの人に知ってもらえるかを模索していた。農業者さんの声を一番近くで聞いて、その声を県や市町村に届け、一緒に協力して、福島の食材を広めていく。緒方さん國分さんたちにしかできない福島の支え方がそこにはあった。情報を発信する側の努力を垣間見ることができた。この人たちの努力をしっかり受け取れるように、福島外にいる私たちも寄り添う心が必要なのだと改めて感じた。そうすれば、福島の食材の良さはますます広まっていく。そんな未来ももう近いかもしれない。

第3章 小高と若者

戻ってこない若者と戻ってきた若者



写真13：和田智行さん

“地域の100の課題から100のビジネスを創出する”をミッションとして掲げ、事業支援を行う小高ワークスペース。その代表取締役を務める和田智行（45）さん（以下和田さん）に話を聞いた。

まずは、なぜこの活動を始めたのかを尋ねた。

――自分自身が避難生活を送っていて、いずれ帰ろうって話は家族でまとまった。一方で若い世代は帰らないって決断をしていた。なぜかって店もないし仕事もないし知り合いもみんなバラバラになっちゃったし。そういう町って前よりもひどい生活になるイメージしか持てなかった。お年寄りにしても、戻ったところで病院がないとか介護施設がないとかそういうところに不安を感じていて、生活できないのではないかとそういう声が多かった。その中で、自分はwebの業界で働いてきていて、そういう競争の激しい業界で働いてきた目線でその状況を見たときに、いろんな課題はあるけど、課題って全部ビジネスの種なんじゃないかと思った。たくさんビジネスのたねが転がっていて、かつそれを誰もやりたがらない、解決する事業をしたがらない。そんな面白い地域ってないのではないかと思ったし、帰ると決めている住民で、若い世代で、かつ起業経験がある。そんな条件が揃っているのは自分しかいないと思って、やろうと決めた。

小高は、原発事故によって、全住民が各地に避難を余儀なくされた。数回にわたる一時帰宅や、準備区域としての期間などもあったものの、避難指示の解除は震災から5年後の2016年。

――5年も6年も別のところに住んで、仕事もないし家だって直さなきゃいけない多分立て替えかしの家じゃない。子供達は、学校だってもう5年も6年もいたらここがふるさとじゃなくななくて避難した

場所が移り住んだ所が故郷になる。

双葉屋旅館4代目女将小林友子さんはそう語った。5年という月日は、とても長い。その時間は、多くの子どもたちの故郷の場所を変えたのかもしれない。

避難指示が解除され、小高にどれくらいの人が帰ってきたのだろうか。福島民友新聞の記事を引用する。以下のグラフを見てもわかるように、2016年の人口は2011年と比較して大きく減少している。しかし、避難指示の解除から間もない16年11月末の段階では1013人だったが、19年3月末に3000人台にまで回復した。その後は、伸びは緩やかになっているが、減ることなく増え続けている。「市は、震災前とは異なるものの、市立総合病院附属小高診療所の診療開始や小学校の統合、『小高子どもの遊び場』（N I K Oパーク）の整備などで生活環境が一定程度整ったとみており、さらに移住・定住の促進に力を入れていく方針だ。」¹⁷



グラフ1：南相馬市小高区の人口の推移

小高での医療や教育の整備やさまざまなプロジェクトの発足は、多くの人が戻ったり、移住したりするきっかけになったのかもしれない。

——何もなかったので、まずは何かを物事を起こすための物理的な環境を作るところからやってみて。そこに自分自身が現場に身を置いて、肌で感じて、必要だと思った事業を、それでかつちゃんと収益性が見込める事業を一個一個作っていきこうって考えて始めた。

和田さんはそう話してくれた。小さなコワーキングスペースを作るところから始めて、小高の町を少しずつ前に動かし始めたのである。

若者への支援とは

——理想は、この地域にいろんな事業が当たり前生まれる状況を作りたい。子供たちにとって、起業するとか商売始めることはハードルが高いことかもしれないけれど、普通のこと。選択肢の一つに普通に上がってくるようなそういう風土を作りたい。

そう強く宣言した和田さんは、続けて具体的に組みたいことを教えてくれた。

¹⁷ 「移住者増...戻る子育て世代 震災前の3割、人口は緩やかな伸び」（2022、8月11日）『福島民友新聞みんゆうNet』 <https://www.minyu-net.com/news/sinsai/serial/1105/FM20220811-722054.php>

（2023、1月12日閲覧）

――あえてあげると、今はやっぱり移住者は来るけれど、住む場所とかビジネスを始めたくても起点とかがなかなかないので、うまくこういう空き地はたくさんあるので、こういう地域の資産をうまく使った事業をやりたいなと思っています。

和田さんが生み出すビジネスの種は、小高の町の問題を解決するだけではなく、誰かのチャレンジのきっかけになりうるかもしれない。それが続くことで、起業すること、商売をすることが当たり前を選択肢に上がるような風土が出来上がり、若者の選択肢を増やすことに繋がる。そういった町全体の認識が変化するきっかけを作ること、それがまさに和田さんのやろうとしていることだ。

――伝えたいこととしては、まずとても面白い地域だよってことを伝えたくて。

そう和田さんは、話を始めた。一度、住民全員が避難を余儀なくされ、ゼロからの暮らしを作っていないといけない状況にあった小高。余計なことをする余裕がないからこそ、10年後100年後に他の地域よりも暮らしやすくなっているのではないかなと和田さんは言う。そして小高という町は、震災後新たに始め、そしてそれがしっかりと地域に根付いている取り組みが多い。それはこれまでも登場した、小高マルシェや、油菜ちゃん、小高ワーカーズベースもそうだ。新しい取り組みが生まれ、それらが続けられている、その挑戦する風土は既にでき始めているのかもしれない。

――若い人たちが関わる余地がたくさんある。既存の社会だと社会を動かしているのは、おじさん達だけれども、ここは本当に何もなくなったので若い人がどんどんやってくれることを、おじさん達は何もできないからどんどんやってもらいたいというそういう風土があるし、そういう人たちがたくさんいるし、そこに共感して面白くなって考えてくる若い人たちがたくさんいるので、そういうフィールドもこの日本にあるよっていうことを知ってもらいたいなと思っています。それで、面白いなと思ったらちょっと遊びに来たり少し滞在してみたりしてみしてほしいなと思いますね。

一度、多くのものを失ってしまった小高だからこそ、できることがあって、生まれてくる新しい環境がある。それは、日本という国には今までなかなか生み出すことのできなかつたものであるのかもしれない。そうした新しい環境は、新たに挑戦する人を応援し、そういった風土がまた新たな社会を作っていく。そんな未来を作っていく上で、とても重要になってくる町が、この小高なのかもしれない。

――都会にいと消費者にしかねない。ここは創造する側に回れる。消費者のままだと、何かあった時に生きる力みたいなものが非常にないことを痛感する。でも、作る側として生活したり、仕事したりして、何かあった時に何とかなる、その時その時対応して、新しいものを生み出せる。そういうことができるっていうメンタリティで生活しているので不安がなくなる。消費者としてだけ生きてると当たり前にあったサービスがなくなったら生きていけないとか、お金が稼げなくなったら生きていけないとか、そういう風になってしまう。そういう意味ですごく創造する側に回るっていう機会がたくさんある地域だなっていう風に思います。

小高に行くことは、さまざまなサービスやモノがあることが当たり前になっている東京にいることと、全く別の生活することなのだろう。それは、ある人にとっては不便なのかもしれない。しかし、多くのサービスやモノを創造する側に回れる経験ができる、そんな特別な場所なのである。ここに来れば、見えるものも、経験することも、聞くことも、全てが新たな価値観を作ってくれる、そんな貴重なものがたくさんある町なのだと私は思う。

――実際にね。両親が公務員で、自分も公務員になるつもりで大学に通っていた子がここに来て、

すっかり変わってしまって、1年半ぐらい小高で生活して、結局いわき市っていうところで地域活動をしている団体に就職して活動している。我々としてはいいのか分からないけどこんなこともある。

そう嬉しそうに話してくれた。



写真14：嬉しそうに話す和田智行さん

小高には挑戦する風土が染み付いているように感じた。一度失ったものは、大きいものの、そこから再生するために多くの人が多く挑戦してきた。実際に私自身も、小高に2日間滞在して、人の温かさや、どんなことにも動じない強い精神力を感じ、価値観が大きく動かされる経験をした。これを読む人にも、ぜひ一度この町の人たちに会ってみてほしいものだ。

これからを見つめる

小高ワーカーズベースで若者への支援を続ける和田さんに、小高の未来について尋ねた。

——自分が居ていい場所とか役に立てるコミュニティとか逆に必要としてくれる場所とかそういう物をたくさん持つことによって人生って安定するのではないかと避難生活を通じて思い始めていた。

和田さんは、避難生活を通して、お金を稼ぐことだけをやっても生きていけないことを実感したという。お金のやり取りではないところでの助け合いがあったからこそ、生きていけたと話してくれた。当時はお金を持っていても、食べ物もガソリンも手に入らなかったという。避難所もいっぱい寝る場所もない生活。そんな中で、感じたことは今の和田さんの活動の原動力につながっている。

——色々な課題があるけれども、それを大きな商業施設とか工場とか誘致して解決するのではなく、地元の人たちが課題を解決するビジネスを、生業を持つというのが当たり前の状況をこの地域に作ることによって、変化に応じて、次々新しい事業が立ち上がっていくような、そういう地域にしたいなと思って。自分はそういう地域に暮らしたいなと思っているし、地域に持続性ができて、自分の人生も持続するのではないかと思った。そこがモチベーションになっている。

和田さんは、地方が中央に依存しないと成り立たない構造自体がおかしいと、今の日本の構造の問題を指摘した。この構造が変わらない限りは、形だけ復興しても、震災を忘れた何年後かに同じことを繰り返してしまうだろうと。原発のような大きな産業を地方に作り、ある程度リスクを背負って、政府や大企業の人間にその地方の行先を委ねるしかない状況。その状況を壊したいと和田さんは話す。だか

からこそ、和田さんが言うように、地域の中で、新しいビジネスを作ることで様々な問題を解決していくことが大事なかもしれない。地域の自立、そして持続性。それが、この震災を教訓とし、これからの未来を変えていくということなのかもしれない。

同じようなことを話してくれた人がいた。双葉屋旅館の4代目女将の小林さんだ。



写真15：小林友子さん

——自分のこととして考えればもっと依存しなくて済むのではないかな、地方にね。一軒家だったらソーラーをつけるとか、大きなビルだったらせめて何割かの電力は自分たちで賄おうとか。あと、あれだけマンションとかがあるなら、そこで排泄されたものを肥料として作れる。そういう努力はあっても良いのかなと思う。そうすれば自分たちである程度ものを作り出せるじゃない。そうしたらこっちの農地をあれだけのメガソーラーで埋め尽くされることはない。自分の所で使うのが一番でしょ。

電力、食料、肥料、さまざまなものがそれぞれの地域ごとに依存しあっているこの日本。食料自給率もエネルギー自給率も低い日本。この現状が、今回のような災害による被害をもたらしたのではないかと二人は語る。その状況を当たり前と思わず、出来るだけ、自分達の地域で作ったものを自分たちで使う、そういった努力があるだけで社会が少しずつ変わっていくのかもしれない。それは2人が話すように、地方も首都圏も同様にだ。今の日本は、互いが互いに依存することが当たり前になってしまっている。“持続可能な社会”が謳われている今、根本的な社会構造の問題点に気づくことのできる若者の必要性が高まっているのかもしれないと私は感じた。私たちが今まで見てきたものを当たり前と思わず、それらの問題点を見つけ、壊していこうとするエネルギーそのものが必要なのかもしれない。

“復興”とは、今まであった生活に元通りにする努力をするのではなく、今までよりももっとより良い生活を、社会構造を創造していくことなのかもしれない。

第4章 小高と移住者

よそ者から見た小高とは



写真16：森山貴士さん

大阪から南相馬に移住し、“地域の経営資源を高め、まちを豊かに”というミッションを掲げ、小高で活動する一般社団法人の代表理事を務められている森山貴士（36）さん（以下森山さん）。私が小高と出会うきっかけとなった人物である。（冒頭）

森山さんと小高の出会いはい偶然的なものだったそう。

――大学出てから、東京のITの会社に就職して、5年くらい働いて、その会社を辞めた時に、地方でもう少し社会課題、教育じゃないですけど、課題に取り組むみたいなことを若い人にやってもらう環境みたいなものを作った方がいいのではないかみたいなこと思って。会社辞めて、それでひよんなことから東北に。友達がたまたま石巻の方に行くって言うので、じゃあ一緒に着いていくわ、というのがきっかけで、初めて東北に来て。その時に南相馬の人に会って、ITで仕事を作っていきたいと言って、手伝ってくれる人を探していますと言ってたので、なにかできるかなと思って来たのが最初です。

2014年から南相馬に来て、8年。その間に行ってきた支援は簡単なものではなかったという。

――こっちにきてITエンジニアとしてそれなりに自分は能力のある人間だって思って来たけれど、やっぱりその一人がいたところで何もできないなと思ったのはやっぱり8年前で。理論上、例えば、ITを使って、ITの農業をして、美味しい作物を作って、売れば、地域のなんか復興に繋がるじゃないですか、理論上では言えるじゃないですか。でもそれってやるためには、そもそもそれを面白いと言ってくれる農家さんがいて、その人が投資できる金銭的余力があって、美味しい作物を作った後に売る、高く売ってという販路があって、それをちゃんと伝えていくブランディングとかマーケティング戦略があって、っていうのが必要で。じゃあこれ地域にあるのかって言った時にない。そこを思い知ったところがあって。

森山さんは移住して痛感した苦勞を語った。それがあって、今の一般社団法人オムスビを組織して活動しているという。

——地域のいろんな力を寄せ集めてできることを増やしていかないと、やっぱり単独で何かできる人がいても、なかなかできることは広がっていかないし。そもそもそういった何か際立った能力っていうのを持っている人はそんなに多くないので。そこを育てていくところを含めてやらないと。それは今のオムスピの理念に入っていますけど。



図5：一般社団法人オムスピの掲げるミッション（HPより引用¹⁸）

森山さんが組織する一般社団法人オムスピのミッションは、「自分達のできることを増やす、仲間を集める、仲間と一緒にできることを増やす」。ここでは、森山さん自身の移住当時に感じた苦勞が関係していた。一人のスキルが高くても、それだけではできることは限られてしまう。だからこそ、仲間を集めて、仲間と一緒にできることを増やしていく。そうすることで、少しずつ社会は前進するのかもしれない。その流れを作ることの重要性を森山さんはこの活動を通して伝えようとしているのだろう。

このことは学校でも、職場でも共通しているような気がする。個人のスキルが高いだけでは何も成果は出ない。そこから仲間を集め、仲間と一緒にできることを増やし、大きな力を発揮し、社会を動かす。忘れてしまわないように心に刻んでおきたいと思った。

「福島をずっと見ているTV」

NHKで2022年12月28日に放送されたテレビ番組である。この番組に森山さんと同じように、震災後に小高に移住してきた人の1人が取り上げられていた。小高診療所で医師をする小鷹昌明（55）さん（以下小鷹さん）だ。小鷹さんは、町全体を健康にするために、地域でイベントを開催するなどして、地域の人同士の交流の機会を作ってきた。小高診療所の医師として、被災地医療に取り組む小鷹さんは、「次のステップがある」と言う。

自分がしてあげられることって一切なかった。
自分が頑張ることで相手を勇気づけられることに気づいた。
自分に求められていることは被災者を支援することだけではない。
この土地で生きることを存分に楽しむことでもあるはず。

18 一般社団法人オムスピホームページ「一般社団法人オムスピ 活動紹介資料」（2022年5月22日更新）

<https://omsb.co/about>（2023年1月14日閲覧）

自分の好きなことをがむしゃらにやるってことも人の支援になると感じた時に、もっと自分のやりたいことをやるうって思った。（番組内から引用）

小鷹さんは番組内でそう語った。一人で何かをしてあげよう、一人で誰かを支えよう、そんなことは不可能なのかもしれない。しかし、何かをしようと努力すること、その土地で生きることを存分に楽しむこと、その姿が誰かの支えになることはあるかもしれない。小鷹さんはそう考え、小高という土地で新しく小説を書き始めたという。自分が昔から秘めていた夢をこの小高という土地で挑戦しようとしているのだ。それも誰かの支えになるかもしれないから。

「医者が一人きたから医療を変えられるとは思わない。みんながみんなちょっとずつできることをすれば大きな支えになっていく。」小鷹さんは、小高という町の医療が成り立っているのはみんながいるからだと話す。一人ではできないことも、集まればできるようになるかもしれない。お互いに支えあって、前に進んでいく。そんな強いメッセージを受け取ったような気がする。

小高という町にはそれだけのパワーがあるのかもしれない。移住者2人は、自分だけでは何もできないからこそ、仲間を見つけて、周りとは協力して前に進んでいくと話してくれた。そんな小高はこれからどんな町になっていくのだろうか。

これまでの復興とこれからの復興

森山さん取材した場所は、“青葉寿司”のお店の跡地。これから“アオスバシコワーキングスペース”となるうとしているところだ。



写真17：元青葉寿司の外観

森山さんはここをコワーキングスペースとパン屋カフェにしようと考えた経緯を話してくれた。

――僕らはそんな支援しているという意識はないものの、ここで仕事を作ることが本当に大事なこと。それと同時に、それができることによって地域の人たちが豊かになったって感じられることが同じくらい大事だと思っていて。逆に言うとその地域の人たちが豊かになったって感じられることで仕事を作るっていうのが多分僕らがやっていけないミッションだと思っていて。

小高で何か仕事を見つけ、何か活動を始める。それ自体が素晴らしい取り組みであることは間違いなし。しかし、森山さんは、その活動によって地域の人たちがどう感じるかが重要だと語る。ただ一方的

に支援する、何か新しい活動を始めただけではなく、その活動に地域の人々が関わって、地域全体が活性化したり、人々の生活が豊かになったりすることが理想なのである。

——インパクトが足りない。

森山さんが小高で始めたコーヒー屋。“Odaka Micro Stand Ber”

森山さんは、ここの経営をしていて、気づいたことがあるという。それは、地域の人の暮らしを変化させるほどのインパクトがあるかどうかという部分だ。コーヒー屋の利用者が一部であること、人がコーヒー屋を利用する頻度がそこまで多くないこと。地元の人々の生活が変わったと思うにはインパクトが足りないと話す。もう少し日常的に色々な人が使う場所で、地域を変えていかないと、地域の暮らしの変化には繋がらない。そう話す森山さんは、そういった部分でもっと積み重ねが必要だと思い、また新たな挑戦をしようとしている。いかに地域の人々の暮らしの中に入り込んで、自然と一緒に地域を変えていけるかが大事ななのである。

02.

Odaka Micro Stand Bar

避難指示解除直後の小高ではじめたキッチンカーのコーヒースタンド。

現在は店舗となり、地域住民に愛されるカフェとして利用されています。



図6：Odaka Micro Stand Berの紹介ページ（HPより引用）

——うまくいってそうなもの何個か出てきている一方で、地域としては何も変わっていない。意識的に乖離している。社会企業みたいな復興活動って私たちには関係ないという空気感を感じる。それはよくないと思う。本当は地元の人にも触れる機会があった方がいい。

森山さんは、“アオスバシコワーキングスペース”をそういった地域の人たちとの交流の場にしたいと教えてくれた。2階でデスクワークをしながら、1階のパン屋カフェの様子を覗けるようにして、そこで新たな交流が生まれたり、とそんな未来を想像していた。そのために天井は吹き抜けにしたり、屋上はフリースペースにしたり、それでもしっかり仕事ができるスペースを確保するために個室のミーティングルームを作ったり、中で何をやっているかが見えるように大きな窓を設置したり——。

“アオスバシコワーキングスペース”を作る上で、意識していることは、いかに地域の人とそこで仕事をする人たちの交流をしやすくするかであった。そこで時間を共にする人たちのことを想像して、その人たちのことを想って、空間を作り出す森山さんはとても楽しそうに見えた。



写真18：リノベーション途中のアオスバシコワーキングスペースの内観と森山さん

これからの復興とは、空間や交流、新たな挑戦を生み出していくことなのかもしれない。新たな取り組みをする、それによって地域を活性化していく。その言葉の中には、地域の人と一緒にと言うキーワードが必要不可欠なのだ改めて感じた。外の人何かやっているなという感覚を地域の人に与えてしまってはいけない。そこに住む地域の人生活に何か変化をもたらし、生活を豊かにしていく。小高でのこれからの復興は、まずはその思考を巡らせる必要があるのだと思う。

小高の未来を想像（創造）する

――復興とか関係ない文脈でここに来てほしい。

小高と接点を持ってほしいと森山さんは話してくれた。復興に興味のある人たちはもうすでにきているから、そうではない人たちに接点を持ちにきてほしいと言う。が気軽にテレワークをしにきて、その中で地域の人と交流する時間を作りやすいようにと“アオスバシコワーキングスペース”を工夫して作っている。そういった人たちの力が今必要なのである。だからこそ、気軽に来て、接点を持つことがはじめの一歩になるのかもしれない。

――僕が大事にしているのは、自己決定権と役割を持つこと。

森山さんは続ける。

――復興として色々な事業を立ち上げますってことやっているけれど、地元の人からしたら何にもコントロールできないことが勝手にやられている感覚で。もう私たちの町じゃないよねってなってしまう。自己決定とか自分の役割がない状況を生み出しかねない。そこを作っていくこと大事。自分たちの力でコミュニティ作ったぞという成功体験を作っていく。

森山さんは地域の人との関わりの重要性を改めて話してくれた。一方的に支援すること、助けること、小高はもうそれらを必要としているフェーズではないという。小高の人と一緒に、小高を活性化していく。一人ひとりが活動に関わること、関われる環境を作ること。小高はもうとっくに、これらを意識するフェーズに入ってきているのだ。

第5章 まとめ

これからの私たちの生き方を考える

ここまで“食材”、“若者”、“移住者”といった3つのテーマに沿って、小高という町を見つめてきた。

“食材”に対する風評被害も、実害も完全になくなったわけではない。今でも線量を測って出荷している。11年間続けてきたその努力が実って、今ではほとんどの人が安心して福島をの食材を食べることができている。被害を乗り越えて作物を作り続け、測り続けたその努力。本当にいいものだからこそ、その良さを知ってもらうための努力。多くの人々の努力がそこには確かにあった。その人たちの努力と苦労を完全に理解することはできないかもしれない。しかし、その人たちの姿を一目見るだけでもきっとその先見えるものが違ってくると思う。そして何より、福島をの食材の良さを純粋に知ってほしいと思う。支援するために、とか、福島は大変だから、とか、そういう観点からではなく、純粋に。それが福島をの食材に対する一番の支えになると私は思う。

小高に帰ってこない“若者”はたくさんいる。住民が以前より減っているのも事実である。それでも小高という町は、挑戦を恐れない町だと私は感じた。一度多くのものを失ってしまったからこそ、ゼロスタートを余儀なくされたからこそ、新しいことに挑戦する環境が整っている。そして、その挑戦を応援しようとする大人がいる。そんな小高に是非一度足を運んでみてほしい。そこで会った人、見た景色、感じたものはきっとこれからの人生を支えてくれると思うから。

東日本大震災は一つの教訓として伝えていくべきものであるだろう。また同じような災害が起こらないためにも、根本的な原因が存在している今の社会構造を変えていく必要があるのかもしれない。それはそう簡単なことではない。しかし、その未来を作っていくのは紛れもなく若者たちである。どう作るも若者次第。私たちは無意識に作ろうとしている未来をしっかりと見つめ直す必要があるのかもしれない。

小高には“移住者”がいる。“移住者”が来たから、一瞬にして町が大きく変わるということはきっとないだろう。その1人がきっかけとなり、仲間ができ、仲間と一緒に何かを成し遂げる。地元の住民と一緒に町を変化させていく。それがきっと小高の町なのだと思う。地元の人と一緒にやらないと、それはいつか小高の町ではなくなってしまう。前からいる人と、移住してきた人と“今”小高にいる人たちが、これからどんな小高を作っていくのかとても楽しみになった。移住しなくても、関わり方はたくさんある。“今”小高にいる人たちと一緒に、色々な場所で、色々な方法で、自分もできることを模索していくことが、これからの小高を守り、作り続けていくことになるのだと思う。

福島をこれからどう“支援”していけばいいのか。私に何ができるのだろうか。そうずっと考えていた私だったが、するべきは“支援”ではないと思った。“支援”と聞くと、堅苦しく、距離が遠く感じてしまう気がする。福島を支援するのではなく、純粋に、対等に、触れてみてほしい。福島をの空気、福島に住む人、福島で出会う言葉、福島で丁寧に作られた食材に。それこそが、震災から11年経った今の福島に必要なものなのだと思う。

課題と限界

今回、8名の方に取材を行い、本稿を執筆した。今まで、光の当たってきた人、当たらなかった人、知られていた事実も、知られていなかった事実にも触れようとしてきた。もちろん、今回光を当てられなかった人がたくさんいるのは紛れもない事実であると思う。見ることができたのは、小高のほんの一部で、断片的なものである。まだ知らない努力、苦労が残ることを今後の課題としたいと思う。

また、小高への滞在期間が2日間のみだったため、完全に取材のみを行うことしかできなかったことも課題としてあげようと思う。実際の支援の様子だったり、普段の様子だったり、住民との関わりなどを取り上げることができたらもっとよかったのかもしれない。普段の様子からしか見えないものがきっとあるだろう。その様子も多くの人に知ってもらいたい、伝えていきたいと今回強く感じた。

何度も足を運んで、何度も話を聞いて、何度も触れ合う。きっと全てを知ることはできないかもしれない。それでも、関わりを続けていきたいと思う。知ろうという気持ちがきっと誰かを救うことだってあると思うから。

終わりに

いつか。福島食材が日本一安全な食材として売られているかもしれない。小高が挑戦したい若者が集まる町として有名になっているかもしれない。地元の人と移住者が一緒になって協力して小高という町は大きくステップアップしているかもしれない。小高の未来は様々だ。けれど、そのどれもが希望に満ちている。

―――また来ます。

私はそう言い残して小高を後にした。帰りの電車を待っている時、反対のホームには学校帰りの地元の高校生がたくさんいた。今日学校であったこと、流行りのアニメのこと、最近の恋愛事情。聞こえはしなかったが、きっとたくさんの言葉が交わされていただろう。今当たり前に存在しているその子たちの日常は、多くの人が守りたかったものなのかもしれない。そんな気がした。

私が小高に住んでいる人に対してできることなんて何もないかもしれない。それでも私はまた小高に行くだろう。また会いたい人がいる。もっと小高のこと知りたい。そう思える素敵な町だから。

これを読んだ人の心の中で、少しでも小高の、南相馬の、福島印象が変わっていたら嬉しい。それは、新たな一面を見ることができたということだから。そして是非、その発見はもっと知りたいという興味が変わってほしいと思う。福島をもっと知ろうとしてほしい。色々な角度から見てほしい。そうしたら、今までは気づかなかった人の努力や、見えなかった苦労が見えてくるかもしれない。そして、その発見は自分の価値観を大きく動かすことにつながるかもしれない。

今回の執筆がきっかけで出会えた全ての人に感謝を込めて。

参考文献

- ・環境省 環境再生・資源循環局(2021)「福島 環境再生 100人の記憶」株式会社マスターリンク
- ・小高マルシェホームページ<https://odaka-marche.com> (2022、12月30日閲覧)
- ・南相馬市 (2022) 「東日本大震災とその後 南相馬市の現況と発展に向けた取組」 <https://www.city.minamisoma.lg.jp/material/files/group/57/torikumiR409.pdf> (2022、12月30日閲覧)
- ・中部電力ホームページ「福島第一の事故原因は、もうはっきりしたの？」 https://www.chuden.co.jp/energy/nuclear/nuc_qa/qa03.html (2022、12月30日閲覧)
- ・福島県庁ホームページ「避難区域の変遷について－解説－」 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/cat01-more.html> (2023、12月30日閲覧)
- ・「『2時間はあつという間』 住民ら初の一時帰宅」 (2011、5月10日) 『朝日新聞DIGITAL』 <https://www.asahi.com/special/10005/TKY201105100549.html> (2023、1月2日閲覧)
- ・スーモジャーナル「震災で無人になった南相馬市小高地区。ゼロからのまちおこしが実を結ぶ」 <https://suumo.jp/journal/2021/01/25/177724/> (2023年1月17日閲覧)
- ・復興庁 福島は今 「震災復興の取り組み10年の軌跡 『福島県の放射線量』」 https://www.fukko-pr.reconstruction.go.jp/2018/fukushimanoima/10th_trajectory/radiationdose/ (2023、1月4日閲覧)
- ・環境省 放射線による健康影響等に関するポータルサイト 「Q&A」 https://www.env.go.jp/chemi/rhm/portal/qa/a_45.html (2023、1月4日閲覧)
- ・NPO法人 チェルノブイリ救援・中部ホームページ 「放射能に負けない！なたね油で福島の農業復興を～南相馬市・菜の花プロジェクト～『油菜(ゆな)ちゃん 誕生物語』」 https://peraichi.com/landing_pages/view/yunachan-story/ (2023、1月5日閲覧)
- ・NHK放送文化研究所 (2021) 「世論調査にみる震災10年の人々の意識 ～「東日本大震災から10年復興に関する意識調査」の結果から～」 https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20210701_8.pdf (2022、10月4日閲覧)
- ・「移住者増…戻る子育て世代 震災前の3割、人口は緩やかな伸び」 (2022、8月11日) 『福島民友新聞みんゆうNet』 <https://www.minyu-net.com/news/sinsai/serial/1105/FM20220811-722054.php> (2023、1月12日閲覧)
- ・一般社団法人オムスビホームページ「一般社団法人オムスビ 活動紹介資料」 (2022年5月22日更新) <https://omsb.co/about> (2023年1月14日閲覧)
- ・NHK (2022、12月28日放送) 「希望の物語を描く」 『福島をずっと見ているTV (Vol.100)』
- ・丹治倫太郎 (2021、3月10日) 「『福島の野菜、東京で売らないで』。震災後、駅でマルシェを続けてきた変化【3.11 #あれから私は】」 『BUSINESS INSIDER』 <https://www.businessinsider.jp/post-230977> (2023、1月11日閲覧)